

終末論を学ぶための大切な準備

聖書は神の言葉か？

1. 部分靈感説、自由主義神学（リベラル）

- (1) 自由主義神学（じゅうしゅぎしんがく、Liberal、リベラル、リベラリズム）は、キリスト教のプロテスタントの神学的立場の一つ。その発生以来、プロテスタント教会の主流エキュメニカル派の多くが採用する立場。－ウィキペディア
- (2) 1750 年頃から西ヨーロッパにおいて、キリスト教で（西方教会におけるカトリック教会・聖公会・プロテスタントの別を問わず）伝統的に捉えられてきた天地創造、および様々な出来事に及ぶ神の摂理といった解釈に対して決別するという「合理主義」の潮流が、大陸系プロテスタントの中に生じた。
- (3) 科学的な見方（進化論等）を許容し、聖書に記されている神話的要素（天地創造、ノアの箱舟、バベルの塔、ヨシュア記等）を必ずしも科学的・歴史的事実とは主張せず、宗教的に有益な寓話（若しくは神話・説話・物語等々）とみなす。－ウィキペディア
- (4) 元日本キリスト教団の牧師の体験談：
*役員会で、キリストが唯一の救いの道だと言ったら、議論になって攻撃された。

2. 逐語靈感説（十全靈感説）（保守）

- (1) イエス、及び初代の弟子たちを含めるユダヤ人が、伝統的に信じてきた立場。
- (2) 「18 まことに、あなたがたに告げます。天地が滅びうせない限り、律法の中の一点一画でも決してすたれることはありません。全部が成就されます。」（マタイ 5:18）
- (3) 「聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。」（第二テモテ 3:16）
- (4) 誤りがない、というのは「原典の内容」に限定される。
*今日の聖書は、原典の内容が、99.9%以上回復されている。

神の言葉を、どう解釈するべきか？

1. 象徴的、靈的な解釈

- (1) 聖書の言葉を、字義通りではなく、象徴的に理解する。
- (2) オリゲネスなどから始まった。（二世紀のアレクサンドリア学派の有名な神学者）
オリゲネスは、素朴な信徒に対する字義通りの聖書の教えは、彼らの理解力に即して行われているものであり、キリスト教の教義が真に意味するところではないと語った。
例えば、素朴な信徒たちに字義通り理解されている「イエスの再臨、審判のときの火、肉体の復活」の教えは、より教養ある人々には「靈的・象徴的な意味」を持っているし、またそのように教えられなければならない、とした。
これは、「聖書に明示されていないことに憶測をめぐらせようとする渴望こそ異端の出どころであるから、明示されていないことについては知らないままで満足すべきである」という、エイレナイオスの神学とは対照的である。

2. 字義通りの解釈

- (1) 聖書の言葉を、原則として、字義通りに解釈する。（著者の意図した通りに読む）

※ただし、象徴的表現は象徴として、韻文は韻文として解釈するということ。

- (2) イエス、及び初代の弟子たちを含めるユダヤ人が、伝統的に信じてきた立場。
- (3) 初臨に関するメシア預言は、全て字義通りに成就した。
(処女の妊娠、死に方、葬られる場所、肉体の復活など)
- (4) 再臨に関する預言も、文字通りに成就する。
- (5) 使徒のリーダー・ペテロの証言

「20 それには何よりも次のことを知っていなければいけません。すなわち、聖書の預言はみな、人の私的解釈を施してはならない、ということです。21 なぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。」(第二ペテロ 1 : 20-21)

救済史に対する全体的・立体的な理解。

1. なぜ全体的・立体的な理解が必要なのか？

- (1) 植松氏の事件の例：事件の要因となった社会的な背景を考える必要がある。

2. 神の三つの役割

- (1) 創造者=所有権
- (2) 王=支配権
- (3) 裁き主=裁判権

3. 神の三つの道徳的屬性

- (1) 聖
- (2) 義
- (3) 愛

4. 救済史の具体的段階

- (1) 天地創造
- (2) アダムとエバの罪による墮落
- (3) メシア（キリスト）の到来に至る準備
- (4) キリストの初臨と、罪の贖い
- (5) キリストの再臨と、全世界の裁き
- (6) キリストの千年王国によって、墮落した世界が回復される
- (7) 新しい天と地。永遠の世界が再創造される。

今は、どのような時代なのか？

1. ダニエル七十週の預言（ダニエル 9 : 24-27）

「あなたの民とあなたの聖なる都については、七十週が定められている。・・・それゆえ、知れ。悟れ。引き揚げてエルサレムを再建せよ、との命令が出てから、油そそがれた者、君主の来るまでが七週。また六十二週の間、その苦しみの時代に再び広場とほりが建て直される。

26 その六十二週の後、油そそがれた者は断たれ、彼には何も残らない。やがて来たるべき君主の民が町と聖所を破壊する。その終わりには洪水が起こり、その終わりまで戦いが続いて、荒廃が定められている。

27 彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物とをやめさせる。荒らす

忌むべき者が翼に現われる。ついに、定められた絶滅が、荒らす者の上にふりかかる。」

- (1) ユダヤ人とエルサレムに帰還していないと、成り立たない預言だと言える。
- (2) 1945年にイスラエル建国、1967年の六日戦争の勝利で、エルサレムの旧市街を占領。
- (3) イエスが夢や幻によって、イスラエル在住のユダヤ人に出現し始める。
- (4) 彼（反キリスト）が、多くの者と契約を結ぶ七年間が残っている。

2. 世界の権力構造

- (1) 反キリストが世界統一をするためには、それなりの下準備が必要である。

「12 この獣は、・・小さな者にも大きな者にも、富める者にも貧しい者にも、自由な身分の者にも奴隷にも、すべての者にその右手か額に刻印を押させた。17 そこで、この刻印のある者でなければ、物を買うことも、売ることもしないようになった。この刻印とはあの獣の名、あるいはその名の数字である。・・数字は六百六十六である。」（黙示録 13：12,16-17）

- (2) おおよそ二百年程度で、世界統一のための仕組み作りが着々となされてきた。

- A) 世界中の金融、エネルギー、食料が、コントロールされてきている。
- B) 中央銀行制度の普及

「金持ちが貧乏な者を支配する。借りる者は貸す者の奴隷となる。」（箴言 22：7）

- C) 「食料をコントロールする者が人々を支配し、エネルギーをコントロールする者が国家を支配し、マネーを支配する者が世界を支配する」（ヘンリー・キッシンジャー）
- D) 国際連合の存在。（フリーメイソンの支配下にある）

3. エゼキエル 38 章

終末論に関する基礎知識

1. なぜ終末論を学ぶことが重要か？

- (1) 使徒たちは、キリストの十字架と復活と共に、比較的早い段階で、終末論を教えていた。

A) 「42 イエスは私たちに命じて、このイエスこそ生きている者と死んだ者とのさばき主として、神によって定められた方であることを人々に宣べ伝え、そのあかしをするように、言われたのです。」（使徒 10：42）

B) 第二テサロニケにおける終末論の教え：

- ✓ 三週間しか滞在できなかったため、終末論を十分に教えることができなかった。
- ✓ 基本的に、終末論もセットで教えていたことがわかる。

- (2) 時が近づいている。

2. 混乱の原因

- (1) 象徴的表現が多い。（大群衆、女、144,000人）
- (2) 聖書の言葉に対する複数の解釈の立場が存在する。（象徴的解釈、置換神学）
- (3) 旧約聖書の預言に対する知識不足

*アロン先生の事例：旧約の預言をしっかりと理解していると、黙示録は決して難しくは無い。

3. 終末論に対する態度

- (1) どの立場を取るかによって、教会に分裂をもたらすべきではない。
- (2) この学びは、特定の立場を押し付けるものではない。

*聖書を読んだ上で、各自が納得できる答えを出していく。

(3) 終末論の学びは、祝福となる。

「この預言のことばを朗読する者と、それを聞いて、そこに書かれていることを心に留める人々は幸いである。時が近づいているからである。」(黙示録 1 : 3)

- A) 神の約束の実現に対する確信が与えられる
- B) 聖い生活を送って主を待ち続けるための、動機が与えられる。
- C) 救われた者の祝福の大きさを実感できる。
- D) 伝道の重要性を理解できる。

4. 終末論（黙示録）に対する4つのアプローチ

- (1) 過去主義：黙示録の内容は紀元 70 年のエルサレムの没落で成就している。
* 獣に相当する者は現れていない。
- (2) 歴史主義：パトモスから世の終わりまでの長い時間の流れを記述したものとする立場。
* ローマ法王が獣だとする解釈があったが、獣の役割を果たしていない。
- (3) 理想主義（比喩的）：黙示録は時間を超えた善の悪に対する勝利を描いているとする立場。
* 使徒たちの立場ではない。
- (4) 未来主義：黙示録の記事は主に終わりの時代に起こることを記述したものとする立場。
* 大艱難時代～メシアの再臨～千年王国～新天新地

5. 今回の学びで採用する立場：未来的アプローチ（千年期前再臨説、患難前携挙説）

- (1) 千年期前再臨説：千年王国の前にキリストが再臨する
* 再臨の時期にも異なる立場があるが、大抵は千年期の前の再臨説が主流である
- (2) 患難前携挙説：大艱難時代の前に携挙が起こる
* 患難前、患難中、患難後、携挙はない、などの複数の立場があり、議論が絶えない。
- (3) 字義通りに解釈していくと、大抵はこの説になっていく。
* 字義通りの解釈は、使徒たちが採用した読み方である。
- (4) 現代のイエスからの啓示は、一貫してこの説を教えている。